

前号から 2 回シリーズで、対話の共通基盤が持てない相手について取り上げています。前号では、関わらないという選択がしづらい状況として、支配と暴力の影響を考えました。今回は、関わらないという選択をしづらくなっていることが、もっとわかりにくい状況について考えてみます。キーワードは権力勾配です。実は学生さんにとってはこちらの方が身近な話です。

関わらない選択をしづらいとき その2

みなさんは指導教員と対話ができないと感じたとき、関わらないという選択をできるでしょうか。おそらく難しいでしょう。成績を決める権限は教員が持っていますし、教員から教わることを独学で習得するのは難しいからです。このように、立場上、与えられている力の差を権力勾配といいます。

「先生から教わる」という関係上、権力勾配の存在自体は妥当です。しかし、権力勾配があると、支配と暴力がなくても、学生の側から教員と関わらないようにすることは難しくなります。気が合わない友達と距離を置いても大学を卒業することはできますが、必修単位を取れなければ卒業できません。相手が持っている権限が全然違うわけです。



第三者に助けを求める

対話が成立しないと感じていて、立場上、関わらないという選択もしづらいときには、身動きが取れなくなり、独力での解決は困難です。第三者に助けを求めましょう。学生相談室や学修支援センター、学生支援課などが有力候補ですが、学業成績に関することであれば教務課が助けになってくれることもあります。話しやすい先生でもいいでしょう。行けばすぐに解決とはいかなくても、第三者を交えて対話的な関係を立て直すことで、出口が見えてきます。

また、教職員においても、支配と暴力が言語道断なのは当然として、人としては学生と対等に接していても、立場上、権力勾配が存在することを意識しておく、潜行する学生とのディスコミュニケーションに早めに気づくことができるでしょう。

